

007 シリーズにおける悪役に対する人種的ステレオタイプ

法学部政治学科 4 年 原田有季

- 1 序論
- 2 先行研究—映画における人種的ステレオタイプの取り上げられ方
- 3 007 シリーズにみられる人種的ステレオタイプ
 - 3-1 *Dr. No* (1963 年)—シリーズにおけるステレオタイプの原型の創出
 - 3-2 *Live And Let Die* (1973 年)—ブラクスプロイテーションとの位置づけ
 - 3-3 *A View To A Kill* (1985 年)—二重の差別を体現する敵役の登場
 - 3-4 *No Time To Die* (2021 年)—第 1 作目に見られたステレオタイプが再現
- 4 結論

1 序論

007 シリーズは映画作品が 2021 年までに 25 作存在し、その中の多くの作品がイギリスや全世界の興行収入ランキングトップ 10 に入るなどヒットを記録してきた。シリーズ初期においてはイギリスや北米など欧米圏を中心としたヒットに留まったが、次第に全世界で人気となった¹。年代別の興行収入をみると、3 作品を除き全世界の興行収入トップ 10 に入っている²。また、演じた俳優はショーン・コネリーからダニエル・クレイグに至るまで計 6 人である。シリーズを通した主なテーマは、イギリスのスパイであるジェームズ・ボンドがソ連をはじめとする東側諸国や悪の組織との対決にある。制作陣の変化や時代の変遷によりシリーズの方向性が多少変わることもあるものの、ボンドが悪役と立ち向かう点は時代を経ても変わらない。ジェームズ・ボンドへの世代を超えた人気は長年続く作品のヒットに貢献していることは疑いようがないが、単純明快なストーリーを盛り上げている悪役の存在も忘れてはならない。人

¹ [All 26 James Bond Films Ranked At The Box Office \(forbes.com\)](https://www.forbes.com/2021/08/16/james-bond-films-ranked-at-the-box-office/)

² [Home - Box Office Mojo](https://www.kinemajournal.com/box-office-mojo/)、『キネマ旬報ベスト・テン 85 回全史 1924-2011』キネマ旬報社〈キネマ旬報ムック〉

間離れした悪事を働く悪役をボンドが倒すことによってボンドへの信頼性と人気を獲得されている。しかし、長い歴史を持つ007シリーズでは、悪役に人種的ステレオタイプを重ねているように思えるものもある。悪役はヒーローであるボンドと対立する存在であるため、悪い印象を持たれやすい。そのため、悪役の描き方は人種的ステレオタイプとの関係で慎重になるべきであるはずだ。

007シリーズは上述のように興行的に成功し、2012年ロンドンオリンピックの開会式でイギリス女王が登場するシーンを、ボンドを演じたダニエル・クレイグがエスコートするという演出があるなど文化的にも大きな影響を持つ。そして、新型コロナウイルスのパンデミックの間でさえ、ハリウッド映画として世界一となる7億3000万ドルもの興行収入をもたらした³ことから根強い人気が見える。また、ボンドのジェットや車を模したおもちゃがある⁴ことからわかるように世界中の子供を含め様々な世代の多くの人々に鑑賞されている。このような大規模な映画で影響力が強いからこそ、人種的ステレオタイプが観客に無意識のうちに植え付けられ、それが社会においてマイクロアグレッションなどの人種差別につながる事が予想される。このような観点から、人種的ステレオタイプが含まれていることが問題となると考える。

本論文においては、シリーズを通して悪役の人種的ステレオタイプ的な描かれ方がどのように変遷したのかを検討する。具体的には、悪役に特定の人種を配置したことがその悪役の性格に影響していることに注目する。なお、取り上げる4作品の選抜方法はこの通りである。ソ連が唯一の敵と設定されている場合は絶対悪として東側が描かれており、文化的ステレオタイプを含んでいるものの、今回の論文の趣旨の人種的ステレオタイプに焦点を当てることから外れるため除く。また、年代的な偏りが少なくなるよう、12年という長期間に7作品でボンドを演じたロジャー・ムーア時代の作品から2作品を選んだため、全主演俳優の作品を取り上げたわけではない。

本論文の全体の構成として、2ではこの論文を書くのに参考にした文献を概観し、4作品における問題点を顕在化させる。3-1では、シリーズ第1作目となる*Dr. No*でステレオタイプ的な悪役の基礎を描きその後の作品に影響を与える点を検討する。3-

³ Zack Sharf, Will 'No Time to Die' Lose MGM \$100 Million? Studio Says Reports Are 'Unfounded' and 'Not True' ['No Time to Die' Losing MGM \\$100 Million? Studio Says It's Untrue | IndieWire](#)

⁴ <https://usa.007store.com/collections/james-bond-gifts-for-children?page=2>

2では、シリーズ第8作目の作品である *Live And Let Die* がブルクスプロイテーション映画との位置づけになっているのではないかということを中心に検討する。3-3では、シリーズ第14作目の作品である *A View to A Kill* における悪役の黒人女性という二重の差別を受ける存在であることに焦点を当てる。3-4では、シリーズ最新作であり第25作目となる *No Time to Die* を取り上げ、悪役に対する人種的ステレオタイプの現在の描かれ方を検討する。

2 先行研究—映画における人種的ステレオタイプの取り上げられ方

まず、ハリウッド映画におけるアジア系の表象について述べている村上由美子著『イエローフェイス』を挙げる。アジア人がアメリカにおいて脅威と思われる時、すなわち移民数が増加して職を奪う対象と見られた時期や幾つかの戦争などの国家間の関係が、映画において反映されているという。また、アメリカ人が描きたい対象としてのアジア人を自在にアジア人の役をアジア系俳優が演じるのではなく、敢えて非アジア系俳優が演じることがあると述べられていた。それは、19世紀—20世紀初頭のヨーロッパで流行した異国趣味に由来し、「地球の裏側にいる東洋人は、まだ得体の知れない不可解な存在であり、同時にそのエキゾティズムは限りない好奇心を誘った」⁵という。そして、アメリカ人がアジア人を演じることによって、アメリカ人の解釈を通じたアジア人となり、アメリカ人観客が心理的にアプローチしやすくなることが、東洋人の俳優を起用しない理由として挙げられている。

クリストファー・フレイリングによる“*No, Mr Bond, I expect you to die*”の文中では悪役について触れられており、悪役にはその時代の不安が投影されているが、麻薬王やダースベイダーのような分かりやすい悪役が007シリーズにおいては好ましいとしている⁶。

007シリーズについて書かれた論文においては、男性性、冷戦、地政学、暴力、文化との関係、ボンドガールといったキーワードが多く見られ、心理学の分野で悪役に

⁵ 村上由美子「イエローフェイス」朝日新聞社、1993年、46頁

⁶ Frayling, Christopher. *No, Mr. Bond, I expect you to die* *New Statesman* 2015, Vol. 144 Issue 5273, 2015, pp74-77.

注目した論文がある⁷ものの、悪役に注目した論文は全体的に見て少ない。その理由として、悪役の「悪」性を評価するのが難しいこと、そして悪役同士の個性が作品によって違うことから客観的に比較するのが難しいことが挙げられるのではないかと考えた。そのため、本論文ではストーリー性をできるだけ排除して悪役の特殊性に焦点をあてることを目標とした。

3 007シリーズにみられる人種的ステレオタイプ

3-1 *Dr. No* (1963年) –シリーズにおけるステレオタイプの原型の創出

Dr. No はシリーズ第1作目の作品であり、アメリカのロケット発射を妨害することを目的としているドクター・ノオが所有する島でボンドが活躍するというのが大まかなあらすじである。この作品は多くの人種的ステレオタイプを含んでいる。まず、悪役に限らず現地の人にボンドが遣いを頼むシーンがあったり、植民地の総督官邸が登場したりと「ボンドがジャマイカに潜入したことで植民地は悪の組織から救われる。」⁸というような印象を観客に持たせている。このシーンは当時の植民地と本国との上下関係を如実に表している描写だといえることができる。このような雰囲気の商品だが、悪役の配役とその演出方法にも問題があると考えている。

まず、悪役のドクター・ノオの見た目の特徴として、高身長であることと中国系であることが挙げられる。原作では彼の見た目について詳しく書かれている。

Fleming describes Dr. No as very tall (1.98 m) and thin. His shaved head is said to be shaped like a 'reverse oil drop', due to its rounded shape, pointed chin, and yellowish tinge of his skin. He is described as having his hair up-rooted, dark eyebrows, smooth cheekbones,

⁷ Kavanagh, Conor, and Andrea E Cavanna. "James Bond villains and psychopathy: a literary analysis. *Journal of psychopathology*." *Journal of psychopathology*, 2019, pp. 273-83

⁸ ジェームズ・チャップマン著「ジェームズ・ボンドへの招待」戸根由紀恵訳、徳間書店、2000年、96頁

thinned nose, and widened mouth. His eyes are without eyelashes
and look 'like the mouths of two small revolvers.'⁹

Kavanagh は、*Do.No* の著者であるフレミングからドクター・ノオの外見についての記述を引用し、細かい人物の外見描写について紹介している。このように見た目を描写することは、文章で読者に悪役を想像してもらわなければならない書籍において人物描写の際に不可欠である。しかし、読者に悪役の雰囲気伝えるために、黄色い肌という設定も必要だったのだろうか。黄色い肌というのが西洋社会において異質性を有することから、悪役としての異質性に用いる意図があったのではないか。

そして、中国系であるドクター・ノオは実際にはフランス系カナダ人の俳優であるジョセフ・ワイズマンによって演じられたため、彼は東洋人風のメイクをしてドクター・ノオに扮している。映画においてドクター・ノオは悪の組織スペクターに支援を受けているのだが、原作ではソ連に援助を受けているという設定であるため、東側として中国系という設定なのかもしれないが、映画においてもその設定を残した理由と、アジア人ではない俳優がメイクアップをしてアジア人を演じるいわゆるイエローフェイスが行われた理由を考察する。

中国系という設定は、東西冷戦において中国というイギリスにとっての敵という立場を利用する原作の意図に加えて、「よく分からないもの」「不気味なもの」を敵にすることによって、イメージを作り上げる思惑があったのだと考えられる。これは、「地球の裏側にいる東洋人は、まだ得体の知れない不可解な存在であり、同時にそのエキゾティズムは限りない好奇心を誘った」¹⁰という指摘があるように、イエローフェイスの由来のヨーロッパの異国趣味から生じたものだといえる。そして、「ハリウッドにおいて、白人俳優が黒人を演じるブラックフェイスが廃れたのち、具体的には1960年代以降になっても、白人俳優がアジア人を演じるイエローフェイスが続いたことは、銘記に値する。」¹¹と示されているように、アジア人を非アジア人がメイクアップして演

⁹ Kavanagh, Conor, and Andrea E Cavanna. "James Bond villains and psychopathy: a literary analysis." *Journal of psychopathology*, 2019, pp. 273-83

¹⁰ 村上由美子「イエローフェイス」朝日新聞社、1993年、46頁

¹¹ 川本徹：日本人俳優たち 巽孝之、宇沢美子編著「よくわかるアメリカ文化史」ミネルヴァ書房、2020年、153頁

じる人種差別的な演出が *Dr.No* にも見て取れる点が悪役に対する人種的ステレオタイプの観点から問題といえる。よって、*Dr.No* は当時の人種的ステレオタイプを含む映画の一つだといえることができる。そして、アジア系への描写に「時代の情勢が反映し、大衆感情が息づいている」¹²という指摘があるようにキューバ危機の同年に公開された映画として現実に東西冷戦の緊迫した状況があったといえるだろう。それを映画に取り入れることによって、ボンドと敵の対立にリアリティを持たせる面では成功しているといえるだろう。

加えて、彼の拠点には東洋趣味といえる置物や家具などがあり、その中でボンドと彼とともに行動するボンドガールは東洋風な服への着替えを強制される。それは彼の中国系というアイデンティティをわざとらしく強調しているかのようである。このような作品の本筋に関係の無い点において、細部にまで西洋的なものを排除したことも、観客とボンドの「こちら側」と悪役の「あちら側」を視覚的に印象付けようとしたことが窺える。

この作品では、植民地支配下であるジャマイカを舞台にすることによる、帝国主義的な上下関係の存在がみられる。その上で、ドクター・ノオの悪役としての面だけではなくて、東洋人という側面も不気味なものとして捉える帝国主義的な価値観によって「あちら側」としての異質性に寄与している。

このような帝国主義的な価値観による悪役の特徴である異質性や人種的ステレオタイプが、長く続く007シリーズにおいて重要な意味を持つ最初の作品に登場したことで、後の作品においてその描き方が模倣され、持続することになる。

3-2 *Live And Let Die* (1973年) —ブラクスプロイテーションとの位置づけ

この作品はシリーズ8作目の作品であり、アメリカにヘロインを蔓延させることをたくらむミスター・ビッグと最終的にジャマイカで戦うことを内容としている。敵のミスター・ビッグという名前は身長が高く体格が大きいことから付けられた名前であ

¹² 村上、5頁

り、原作では“grey-black, taut and shining like the face of a week-old corpse in the river”¹³というように筆者が醜い容貌を指定している。

この作品については、ブラックスプロイトーション映画の成功に便乗しているとの指摘¹⁴がある。

「ブラックスプロイトーション映画とは、基本的に白人スタッフが（出演料の安い）黒人俳優に演じさせる 1970 年代の犯罪アクション映画のこと」¹⁵である。犯罪アクション映画としているのは、ストーリーが分かりやすく、興行的にも良い成果を見込めるからだろう。

またこのような説明もある。

Blaxploitation—a film genre geared toward black audiences—
emphasized the exploitative nature predominantly white, Western
societies had on blacks. Blaxploitation relied on images and themes
familiar to black communities, and the genre’s character depictions
usually deconstructed the stereotypical images of black life presented
in mainstream films.¹⁶

Alexander は、ブラックスプロイトーション映画とは黒人観客をターゲットとしたジャンルであり、白人中心の西洋社会が黒人に対して持つ搾取的な面を強調しており、映画の内容として黒人社会に馴染みのあるものをテーマに選んでいるとしている。従って、ブラックスプロイトーション映画の特徴は黒人俳優が多く出演しており、観客にも黒人が多い映画ということができるだろう。

¹³ Fleming I, *Live and let die*, London: Jonathan Cape 1954.

¹⁴ ジェームズ・チャップマン著「ジェームズ・ボンドへの招待」戸根由紀恵訳、徳間書店、2000年198、208頁

¹⁵ 赤尾千波「アメリカ映画に見る黒人のステレオタイプ」富山大学出版会、2019年、67頁

¹⁶ Alexander, Camile S, “Forget Mammy! Blaxploitation’s Deconstruction of the Classic Film Trope with Black Feminism, Black Power, and “Bad” Voodoo Mamas” *The journal of popular culture.*, 2019, Vol.52(4), p.839-861

ブラクспロイテーション映画の様相を見せているのはそれが当時の映画業界において興行収入を見込めると考えられていたからだろう。もちろん映画業界において流行を取り入れることは商業的に重要である。しかし、人種的に偏りのある配役という特徴を持つブラクспロイテーション映画という流行に乗ることによって、*Dr.No*をはじめとするシリーズの以前の作品での人種的ステレオタイプを含んだ悪役の描かれ方が、この作品においても持続することになったといえるのではないか。確かに、この作品において多くの黒人俳優を出演させることによって、人種的多様性という点では広がりを見せたとの評価を得ることができるかもしれない。しかし、悪役に黒人を配役した上で、わざわざハーレムにボンドが一人で出かけていき、悪者をやっつけるという「白人のヒーローの優位性を観客に再確認させる」¹⁷行為は、演じる俳優がロジャー・ムーアになった初めての作品においても人種的ステレオタイプの点で改善はされなかったことを示している。

また、本作品ではヴードゥー教を信じている悪役側の黒人の描写があるのだが、その点も人種的ステレオタイプの観点から問題を含んでいる。“Blaxploitation narratives some-times incorporate Louisiana voodoo as a horror element”¹⁸という指摘があるようにヴードゥー教はブラクспロイテーション映画においてホラー的要素として存在することがある。この点、*Live And Let Die* はブラクспロイテーション映画の特徴を捉えているといえる。また、「なぜ、黒人といえば愚鈍な乱暴者か、秘術やヴードゥー教を信じ切った原始的民族でしかないのだろうか。」¹⁹という批判があるように、単一的な表象に留まる点がステレオタイプに繋がるのだと考える。ヴードゥー教の演出は人種的な側面のみならず、文化的な側面でも西洋より劣っているということを示しているようだ。一方、この作品において白人でヴードゥー教や麻薬に関わる人は登場せず、割合的に多くを占める黒人俳優が悪役に配置されることで黒人对白人の対立の構図を観客に植え付けることにあるのではないか。

¹⁷ ジェームズ・チャップマン著「ジェームズ・ボンドへの招待」戸根由紀恵訳、徳間書店、2000年、202頁

¹⁸ Alexander, Camille S, *Forget Mammy! Blaxploitation's Deconstruction of the Classic Film Trope with Black Feminism, Black Power, and "Bad" Voodoo Mamas*, 2019, Vol.52(4), p.839-861

¹⁹ チャップマン、207頁

公開当時アメリカでは、新聞記事での論評で“‘Live And Let Die’ turns old stereotypes inside out”²⁰とあるように、この作品はこれまでのステレオタイプをひっくり返したと評されていた。具体的には、黒人が演じる役がウィットに富んでいることなどから、これまでのステレオタイプの役ではなく、人種差別的ではない作品という捉えられ方をしていたということだ。

もちろん、CIA から味方として黒人が演じるフェリックス・ライターがボンドと協力するシーンがあるように、全く黒人の味方がいないわけでない。しかし、CIA からの協力はあくまで助けとしての存在であって、悪役ほどのインパクトがある存在ではない。そして、制作側も現在この作品を見る観客側も、味方に黒人がいるから人種差別的ではないという短絡的な思考に導かれてしまう可能性があることが問題点だろう。

この作品では、俳優の人種別の割合という観点では多様化が進んだと評価することができる一方、人種によって敵か味方か分かるという構造になっているところが悪役に対する人種的ステレオタイプを表しているだろう。そのため、悪役が必要不可欠な存在である 007 シリーズにおける人種的ステレオタイプが強化されたと結論付けることができる。

3-3 A View To a Kill (1985 年) —二重の差別を体現する敵役の登場

この作品はシリーズ 14 作目であり、シリコンバレーを洪水で壊滅させることをたくらむゾリンと対決するという内容である。悪役として、白人男性のマックス・ゾリンと黒人女性のメイ・デイがおり、二人ともナチスの人体実験によって超人的な能力を持っているという設定である。

この作品で問題であると考えているのはメイ・デイのキャラクター設定と、それが 80 年代という時代に上映されたことである。まず、80 年代は『カラー・パープル』がピューリッツァー賞を受賞するなど黒人女性作家の活躍がみられた時期である。『カラ

²⁰ Canby, Vincent, The Bad Guys Are Black, New York Times; Jul 15, 1973; ProQuest Historical Newspapers: The New York Times, pg. 101

『カラー・パープル』は「女性の解放を主張し続けた 80 年代のアメリカの社会背景」²¹を描いており、黒人女性という二重の差別を受けている人々に焦点があてられた時代といえる。そして、ベル・フックスは黒人女性のことを「性差別主義的で、人種差別主義的で、そして階級差別主義的な抑圧の矢面に立たされている」²²と述べている。前の時代より先進的になったといえる 80 年代において、幾重の差別を受けてきた黒人女性への抑圧を解消するべきである。しかし、この作品において悪役としてステレオタイプのなキャラクターを設定している。その点で、メイ・デイという超人能力を持ち、野生的で女性性を無視したかのようなキャラクター表象は問題があるのではないか。

メイ・デイの超人能力を持つという点ではゾリンと同じであるが、メイ・デイはゾリンの部下という設定で登場する。ここで、メイ・デイがどのようなステレオタイプのなキャラクターに分類されるのかを検討した上で、「ボンド・シリーズのなかではなかなかやっかいな存在」²³とされるメイ・デイの特殊性を導く。

メイ・デイは高所から飛び降りることができたり怪力を持っていたり物理的に強い力を持っている。このような性質からメイ・デイは「マジカル・ニグロ」的なキャラクターといえるのではないか。「マジカル・ニグロは特殊能力を持っており、理想の黒人。白人のためにはたらく。本能的な力がふつうの人間より強く、やや動物じみて、自然の一部のような感じ。」²⁴という黒人のステレオタイプのなキャラクターの種類である。メイ・デイの、ゾリンという白人のボスのためにボンドと戦い、普通の人間より身体能力が非常に優れており、肌の露出が多いという設定はマジカル・ニグロ的キャラクターの特徴を捉えている。もっとも、マジカル・ニグロというキャラクターは 1990 年代に映画に多く登場するという²⁵。そうだとすると、マジカル・ニグロの登場作品はこの作品のおよそ 10 年後にたくさん製作されることになっている。それでは、

²¹ 朴香芸「小説から映画へ—『カラー・パープル』のアダプテーションにおけるジェンダー表象の変容」『大阪大学言語文化学』第 26 号、2017 年、57-69 頁

²² ベル・フックス著 野崎佐和、毛塚翠訳『フェミニズム理論—周辺から中心へ』あけび書房、2017 年、37 頁

²³ ジェームズ・チャップマン著「ジェームズ・ボンドへの招待」戸根由紀恵訳、徳間書店、2000 年、275 頁

²⁴ 赤尾千波「アメリカ映画に見る黒人のステレオタイプ」富山大学出版会、2019 年、115 頁

²⁵ 上記に同じ

メイ・デイは年代的な関係からマジカル・ニグロ的キャラクターといえないのではない。ここで、マミーというステレオタイプのキャラクターに注目したい。マミーとは、「白人に対して常に忠実で、知的には白人より劣る」という特徴を持ち、「人間として性的な、つまり女性的な部分がないかのように描かれている」²⁶。マミー的キャラクターとして有名なのが、1939年公開の映画『風と共に去りぬ』の「マミー」という登場人物である。黒人奴隷であるマミーという女性は、仕えている白人の家庭の娘の世話をしている。メイド役として「ヒロインのきゃしゃな体つきと肌色の白さを引き立てるに十分」²⁷な存在で、白人が優れていることを引き立てる存在として描かれた。A View To a Kill よりも 50 年近く前の作品のキャラクターが、未だにその性格が利用されており、ステレオタイプのキャラクターが再生産されているのだ。

そして、「マミー」が強くなったのが「マディアおばさん」だという考えがある。男性に負けまいと好戦的になり「怒っている黒人女性」が立つ瀬も与えない非情なイメージとして定番²⁸という特徴を持つ。白人のゾリンに対して忠実であり、女性的な部分が強調されていないメイ・デイはマミー的キャラクターであるといえるし、またボンドに対して体力的に優勢で襲い掛かる面ではマディアおばさんのキャラクターだということもできる。メイ・デイがマジカル・ニグロ的キャラクターもしくはマディアおばさんのキャラクターどちらにあたるにしても、ステレオタイプのキャラクターであることには変わりはない。メイ・デイの存在によって、マジカル・ニグロが頻繁に登場するといわれている 90 年代の以前からマジカル・ニグロ的キャラクターは存在したということができる。加えて、マミーのようなキャラクターが再生産されていることをこの作品は示している。

そして、007 シリーズの中でメイ・デイを見たとき、メイ・デイは女性でありながら、これまでの男性の悪役が多かった作品の中でハニートラップなどのボンドガールにありがちな手段を使うタイプではなく、身体的に「強い」女性という存在である。それは、これまでの作品では初めてのキャラクターであり、女性はボンドガールと呼ばれるような性的にボンドを誘惑するというステレオタイプを打破しているというこ

²⁶ 赤尾、21 頁

²⁷ 赤尾、21 頁

²⁸ 赤尾千波「アメリカ映画に見る黒人のステレオタイプ」富山大学出版会、2019 年、24 頁

とができる。一方、黒人ステレオタイプのキャラクターとしての分類に幾つか該当するという点で人種的なステレオタイプはこの作品の悪役においても表れている。

そもそも、黒人女性がいくつもの種類の差別の対象になっていることの理由の一つとして、ベル・フックスの言葉を挙げる。「白人のフェミニストが、黒人女性を激しく個人攻撃している状況において、攻撃されているのは自分であり、自分こそ犠牲者であると思っていることはしょっちゅうだった」²⁹

この考えは本作品においても当てはまるのではないか。すなわち、白人の観客は自身をボンドに重ね合わせ、黒人女性という「脅威」をボンドと共に体験することによって、自らが攻撃されていると感じる。そして、白人が犠牲者であると思い込み、その心理を利用して悪役の恐ろしさを作品において際立たせている。

また、このような指摘がある。

In recent films, the Bond girl villain, as an almost entirely cinematic construction, has become increasingly important to the film's ideological system of meaning. Bond has changed but stayed the same. Each successive film contains a variety of constituent parts that renders every film a complete and independent narrative within a larger fictional context. The Bond girl villain has been reconstituted to support the expectations of Bond films. (Garland, p187)

Garland は、007 シリーズにおいて各作品が持つ独立性が大きくなった一方で、ボンドの性格には変化が乏しく、敵としてのボンドガールが 007 シリーズに新鮮味をもたらし、シリーズにおいて重要な役割を果たすようになったと示している。そこで、メイ・デイを“Bond girl villain”とするならば、メイ・デイは同じような性格や属性の悪役とボンドの対立というマンネリ化していたシリーズに新鮮味を出す目的での悪役とすることができるかもしれない。ボンドガールが悪役になった例は過去の作品でもあるが、身体的にボンドより強く脅威となるという役はメイ・デイで初めてだからであ

²⁹ ベル・フックス著 野崎佐和、毛塚翠訳『フェミニズム理論—周辺から中心へ』あけび書房、2017年、35頁

る。そして、新鮮味を出すことによるシリーズ・作品の商業的人気という目的の中でステレオタイプの役になったのは、人種的なステレオタイプへの配慮より新鮮味からもたらされる興行面という側面だけを見た結果ということができるかもしれない。

3-4 *No Time to Die* (2021 年) –第 1 作目に見られたステレオタイプが再現

この作品はシリーズ第 25 作目である。日本海にあるソ連が保有していた島で生物兵器の拡散を防ぐという内容である。悪役のサフィンが作品最初に能面を被って登場し、顔に火傷を負っている。この作品で特徴的だといえるのは黒人や同性愛者の同僚の出演や悪役がエジプト系であるなどこれまでの作品より多様性に配慮したことが感じられる点だ。しかし、「多様性が 007 に持ち込まれた」という点に留保が必要であると考えられる。ある人種をある役に配役することはできても、その人種であることが物語上注目されてしまうのでは、真の多様性ではないのではないか。

While the casting of Lynch suggests Nomi's success in the field, it is hard to see a pathway for her character that does not center on her incompetence or disposability if Bond, who is being called out of retirement, is to end the film with his original agent number. While progressive on the casting front, *No Time to Die* (much like *Skyfall*) might be regressive in its representation of women of color.³⁰

Funnell は、以下のように指摘している。まず、007 シリーズにおいてスパイに与えられる番号は通常そのスパイが死亡しない限り別人には引継がれないものとの理解が観客間にはある。しかし、今作のヒロイン的存在であるノーミはボンド不在の間 007 の番号を割り当てられ任務を遂行しているが、ノーミは引き続き作品内で活躍する存在であるのにボンドが復帰したら 007 の番号をボンドに譲っている。おそらく、ボンドが任務に戻ってきたということを印象付ける演出で 007 という番号をボンドに譲る

³⁰ Funnell, Lisa *Nomi/No Me?: Race, Gender, and Power in No Time To Die* Lisa Funnell / University of Oklahoma – Flow (flowjournal.org)

ことが行われているのだろう。しかし、その点でノーミの無能さや使い捨てを示すことになる。Funnellは述べている。よってキャストの面では進歩したが、有色女性の活躍においては後退したとしている。

ある人種が役として登場しても、それが何も意味せずただの1人の登場人物と思われることが真の多様性には求められるだろう。上記のように最終的には007は白人男性演じるボンドであるという前提の下、有色女性が譲ることも人種的ステレオタイプの観点からは真の多様性に反している。そうだとすると、今回取り上げた前3作と比較すると様々な役に様々な人種の配役がされていることは明白である。「この人種が演じているから悪役だろう」というような*Live And Let Die*での演出とは異なっている。

しかし、この作品では人物単体の配役に配慮することができているといえても、ある民族のイメージには偏見が残っているのではないか。それは、映画作品においてキャラクターづけをすることが観客を引き込むことに繋がることの影響していると考えられる。

悪役を演じたラミ・マレックはエジプト系であるが、インタビューでこのようなことを話している。「(悪役の行動を) 思想・信条や宗教を反映したテロ行為だと考えることはできません、それは僕には受け入れられない、ということです。」³¹と述べ、悪役を演じる俳優が悪役としてのキャラクターについて述べている。ここから、映画の制作に関わった人々の間で、悪役の人種的ステレオタイプについて意識していることが窺える。エジプト系であるマレックが仮にテロ行為をする設定であるとしたら、「イスラム教はテロをする危ない宗教」といった社会に現に存在するステレオタイプを増幅させるだろう。この作品では、彼が演じるサフィンが日本趣味を持っており、舞台もヨーロッパや日本海に限定されるなど、ラミのエジプト系であることを意識したのか、エジプトや中東を意識させられる場面はない。この点で、俳優自身の人種と悪役の性格を切り離すことに成功したということが出来るだろう。もっとも、この作品の最終的な舞台は日本海にある架空の島とされており、そこには日本風の庭園や部屋、そしてソ連が作ったという構造物が残っている。サフィンは悪役として日本にもソ連にも関係がないのにも関わらず、このような島が本拠地ということになっている。映

³¹ 入倉功一「ラミ・マレック『007』悪役を引き受けた条件」ラミ・マレック『007』悪役を引き受けた条件 | シネマトゥデイ (cinematoday.jp)

画の映像作品という観点から考えても、イギリス出身のジェームズ・ボンドがイギリス周辺やヨーロッパで戦闘を繰り広げる演出で十分地理的に広く映像を楽しめるはずだ。しかし、ヨーロッパから遠く離れた日本海に拠点を作ることで、悪役サフィンとヨーロッパの人々との心理的な距離を作り、さらに日本やソ連を登場させることによって「よくわからないもの」というイメージをつけたのではないか。

日系4世のアメリカ人監督であるキャリー・フクナガは「そこに僕の要素が入るのは避けられないよね。だけど、クラシックなボンド映画の悪役やアジトへのオマージュにもなっている。」³²と述べている。確かに、この作品はあらゆる点で*Dr. No*でのシーンと似ているところがある。しかし、監督は以前の作品に似せることをオマージュと呼んでいるにすぎないのではないか。

作品内の配役や監督・悪役を演じたマレックのインタビューから読み取ることができるよう、制作側はこの作品において人種的なステレオタイプの描写が無いことをアピールしているように捉えられる。そのため、多くの観客はこの作品においては人種的なステレオタイプが存在しないと考えるかもしれない。しかし、実際には人種的なステレオタイプをオマージュという言葉を使って濁そうとしているのではないか。*Dr. No*からおよそ60年経過したこの作品においても、ある文化へのステレオタイプを持ち込むことが、作品を面白くするための簡単な方法だと無意識的にも考えられているのではないか。もちろん、どの作品にもある文化が登場し、ステレオタイプの側面が描かれることがあるし、そもそもステレオタイプそれ自体は悪いものではない。ステレオタイプは人々がテレビやSNSなどを通して情報を得る過程での不可避的な情報の偏りにより発生すると考えられ、ステレオタイプであると判断できたらその上で楽しむことができ、それ以上の差別を生まないように努力できるからだ。しかし、007シリーズは敵が設定されることで物語が成り立つものであるため悪役が毎回登場し、悪役とステレオタイプが結びつけられることがほとんど避けられない。そのため、ステレオタイプは007シリーズにおいては負の面を持つことが多く、悪役についてはステレオタイプを生じさせる要因はできる限り除去するのが望ましいと考える。それと

³² 市川遥「『007／ノー・タイム・トゥ・ダイ』に色濃い日本要素！キャリー・フクナガ監督インタビュー」『007／ノー・タイム・トゥ・ダイ』に色濃い日本要素！キャリー・フクナガ監督インタビュー | シネマトゥデイ (cinematoday.jp)

同時に、ステレオタイプの要素が全く無い状態の悪役を作ることは現実世界を舞台にしている以上は困難だといえる。しかし、制作側も観客も人種的ステレオタイプを乗り越えたという気持ちになっているところがこの作品における重要な問題点だ。制作の側に様々な人種を配役したから人種的ステレオタイプの問題をクリアしたという慢心が垣間見えるところが今後改善されるべき点だろう。そして、観客の側にも映画の中の世界と現実世界の真実とを的確に見抜く能力が求められているだろう。

4 結論

4 作品の悪役に共通するのは、見かけにおいて悪役とわかることである。

There is also a racial quality common to all villains: they tend to be of mixed blood and their origins are complex and obscure. The villains are usually born in an ethnic area that stretches from Central Europe to the Slavic countries and to the Mediterranean basin³³

Eco は「中心の」ヨーロッパ出身ではないか、出自が不明で混血が多いことを悪役の特徴として挙げている。いわゆる「中心の」ヨーロッパではない地域の出身であることは、今回の4作品に共通することである。

そして、顔にけがを負っていることや、身体的にポンドを凌駕するような点も共通点として挙げられる。

これらの悪役に共通点がある理由の一つとして、「表情ひとつ変えずに単調な『地獄の声』でノオ博士を演じたジョセフ・ワイズマンは、世界支配をねらう誇大妄想狂という、悪人のプロトタイプをつくりあげていた。」³⁴という指摘に注目したい。この悪人のプロトタイプを参考に、シリーズ第1作目の悪役を後の作品においても参考にしていることが考えられる。007 といった長期間続くようなシリーズものにおいては商

³³ Eco Umberto. The narrative structures in Fleming. In: Del Buono O, Eco U, Eds. The Bond affair. London: Macdonald 1966, pp. 35-75

³⁴ ジェームズ・チャップマン著「ジェームズ・ポンドへの招待」戸根由紀恵訳、徳間書店、2000年、101頁

業的な成功がないとシリーズを存続できなくなることが考えられるため、ヒット作を模倣することによって、その作品のヒットをある程度担保できるという面があるだろう。

そして、今回取り上げた4作品の悪役が同じような性質を有するということは、今後も人種的ステレオタイプを含んだ悪役が再生産されることを示唆していると考えられる。007シリーズにおいてはオマージュと称される「お決まりのシーン」がいくつも存在する。いわゆる「内輪ネタ」として楽しめるのだが、それだけではなく、人種的ステレオタイプについても踏襲されるのは問題がある。そもそも、オマージュという言葉で前の作品を踏襲することはその作品を超えられないことを意味するのではないか。真の人種的多様性を認めて人種的ステレオタイプを減らすことが求められているのに、未だに「異質性」を人種的ステレオタイプに求める点はシリーズを通して変化が乏しい点だ。そして、何か異質なもの、というイメージを持ったキャラクターを悪役以外に設定することが、物語の本筋との関係で難しいことから、悪役の人種的ステレオタイプを持たせてキャラクターの役割を明確にしている側面もあるといえる。特にハリウッドやイギリスで制作されており、欧米からのヒットでシリーズを保ってきた本シリーズは、敵の異質さを目立たせるために、彼らの「よく分からないもの」というイメージを持つ対象である欧米以外の地域や人種を利用した。欧米以外の地域に持つ「よく分からないもの」というイメージは、東洋を異国趣味として捉えることや、当時のインフラの未発達による知識の不足や帝国主義的な考えに求められるだろう。

しかし、シリーズ開始時と現代を比較して、情報や人の移動のスピードは変化し、文化へ人種の捉え方も変化している。敵の異質性を人種的ステレオタイプに求める時代は終わりを告げたといえる。特に007シリーズのような影響力の大きい映画は、目指している社会の価値観を反映するような作品である必要があるだろう。最新作でダニエル・クレイグはジェームズ・ボンドを演じるのが最後である。ボンドを演じる俳優が交代するのを機に、徐々にこのような悪役の描かれ方が変わることを期待する。

また、悪役への配役以上に世間が盛り上がりを見せるのが主人公であるジェームズ・ボンドの配役であるといえる。ジェームズ・ボンドの候補の話題になると、女性や有色人種がジェームズ・ボンドとなり得るかが議論となる。長く続くシリーズにお

いて「ジェームズ・ボンド」というキャラクターは白人のイギリス人男性というイメージが定着した。そのイメージを覆すことが真の人種的多様性に必要なのか、それとも 007 シリーズ以外で白人男性以外が配役された新たな作品を作ることで足りるのか、というような観点から人々が議論していく過程で人種的ステレオタイプについての考えを深めることができるだろう。

参考文献

書籍

- 赤尾千波「アメリカ映画に見る黒人のステレオタイプ」富山大学出版会、2019年
- ジェームズ・チャップマン著「ジェームズ・ボンドへの招待」戸根由紀恵訳、徳間書店、2000年
- ベル・フックス著 野崎佐和、毛塚翠訳『フェミニズム理論—周辺から中心へ』あけび書房、2017年
- 村上由美子「イエローフェイス」朝日新聞社、1993年
- 巽孝之、宇沢美子編著「よくわかるアメリカ文化史」ミネルヴァ書房、2020年
- 『俺たちの007』日之出出版、2015年
- Dougall, Alastair. *James Bond Encyclopedia*. DK Publishing, 2014
- Fleming I. *Live and let die*. London: Jonathan Cape 1954

新聞

- Canby, Vincent, *The Bad Guys Are Black*, *New York Times*; Jul 15, 1973; ProQuest
- Historical Newspapers: *The New York Times*, pg. 101

論文

- 赤尾千波「『ガン・ホー』との遭遇とアンクル・トム—アメリカ映画における黒人ステレオタイプ研究 その1」『富山大学人文学部紀要』第56号、2012年、201-211頁
- 朴香芸「小説から映画へ—『カラー・パープル』のアダプテーションにおけるジェンダー表象の変容」『大阪大学言語文化学』第26号、2017年、57-69頁
- Alexander, Camille S. "Forget Mammy! Blaxploitation's Deconstruction of the Classic Film Trope with Black Feminism, Black Power, and "Bad" Voodoo Mamas" *The Journal of Popular Culture* vol.52, 2019, pp. 839-61
- Eco, Umberto. *The narrative structures in Fleming*. In: Del Buono O, Eco U, Eds. *The Bond affair*. London: Macdonald 1966, pp. 35-75

Frayling, Christopher. *No, Mr. Bond, I expect you to die* New Statesman 2015, Vol. 144 Issue 5273, 2015, pp74-77.

Garland, Tony W. *The coldest Weapon of All: The Bond Girl Villain in James Bond Films*. Journal of Popular Film and Television, vol 37(4), 2009, pp. 179-88

Kavanagh, Conor, and Andrea E Cavanna. "James Bond villains and psychopathy: a literary analysis. Journal of psychopathology." Journal of psychopathology, 2019, pp. 273-83

ウェブサイト

Bean, Travis "All 26 James Bond Films Ranked At The Box Office" All 26 James Bond Films Ranked At The Box Office (forbes.com)

Home - Box Office Mojo

Funnell, Lisa, "Nomi/No Me?: Race, Gender, And Power in No Time to Die"

2019 Nomi/No Me?: Race, Gender, and Power in No Time To Die Lisa Funnell / University of Oklahoma - Flow (flowjournal.org)

Metz, Nina, "Does the pandemic + streaming equal the end of movies at the theater?" Will moviegoing survive? - Chicago Tribune

The Films | James Bond 007

市川遥「『007／ノー・タイム・トゥ・ダイ』に色濃い日本要素！キャリー・フクナガ監督インタビュー」『007／ノー・タイム・トゥ・ダイ』に色濃い日本要素！キャリー・フクナガ監督インタビュー | シネマトゥデイ (cinematoday.jp)

入倉功一「ラミ・マレック『007』悪役を引き受けた条件」ラミ・マレック『007』悪役を引き受けた条件 | シネマトゥデイ (cinematoday.jp)

Zack Sharf, Will 'No Time to Die' Lose MGM \$100 Million? Studio Says Reports Are 'Unfounded' and 'Not True' 'No Time to Die' Losing MGM \$100 Million? Studio Says It's Untrue | IndieWire